

看護技術について

永井 敏枝

まずここで言う「看護」とは職業としての看護であり、しかもその職業は専門職であることを前提としてお話します。しかも看護は、知的専門職である。なぜなら高度な学問的・精神的な活動であるから、ではその要素の主なものを考える。

1. 使命感をもつ

看護は人間を対象として活動する職業であり尊い生命に直接関るかもしれない。William Osler (1849～1919) 先生のことばに次のようなことがある。「自分達がこの世にあるのは自分の幸せのためではない、患者の幸せのためである」他人の幸せのために自分が満足できることが望ましい。

2. 一般的教養を豊に持つ

これは共感の育成に資すると同時に人間性を豊にする。対象者はあらゆる異なる環境状態の人間である。

3. 専門的学問を追及し、学際的アプローチができる

これには教育期間も長く、生涯勉強する態度。

4. 公益的サービスを提供する

最初にあげた使命感に通ずるが、「心の報酬を求めない」「してあげたから」「あれだけしたのに」ということばは何かみかえりを求めている。(体験談は省略)

5. 社会が認める

国家的免許が必要であり、しかも社会から尊敬と信頼が得られるような仕事をする。

Ⅰ. 看護における技術の構成

1) 看護の場合の技術は単なるサイエンスではなく、アートであると考え。単なる画一的な技術、技倆だけではSkillである。看護の対象は人間である。人間は生きていて、いずれは死を迎える。そして「今」である。しかも看護をする側も人間であり、生きた存在である。そこで両者が今、現在接している「今」において最善の「わざ」と

「知」を提供する。しかも「愛」の心をこめての実践である。

2) 時代は変化し、医療環境も変化していく。時代の変化は対象者の生活様式、物の考え方、物品・機器類の進歩、法的諸問題の改革と、その人の生きる環境の変化に対応していくことが必要となる。医学の分野に於いても同様、知識形態・方法、薬品の開発、医療・看護機器類の進歩とめまぐるしく変わることに対応する知識の修得が必要であり、この分野では技術がサイエンスの部分である。

3) 自己評価、他者査定の根拠とする。

職業・学問としても伝承的役割が存在する。技術は技能・技倆を介し、しかも熟練することで両者の安全・負担の軽減になりその程度をあげることで後輩の指導に役立てる。

Ⅱ. 看護における技術の構造

1) 一般的にみる技術は次の通りである(図1)。

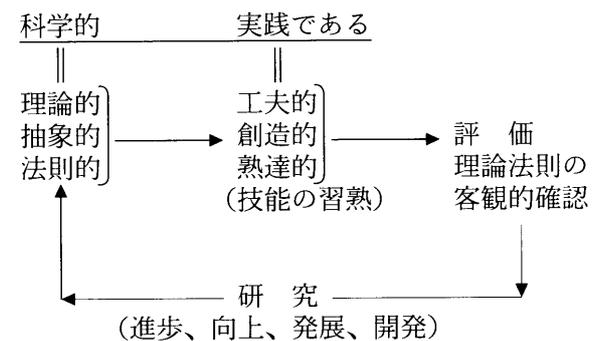


図1. 技術の構造

2) 看護における技術の構成

看護過程の構成は科学的問題解決法を基礎理論として考えられており次の図式で表わされる。

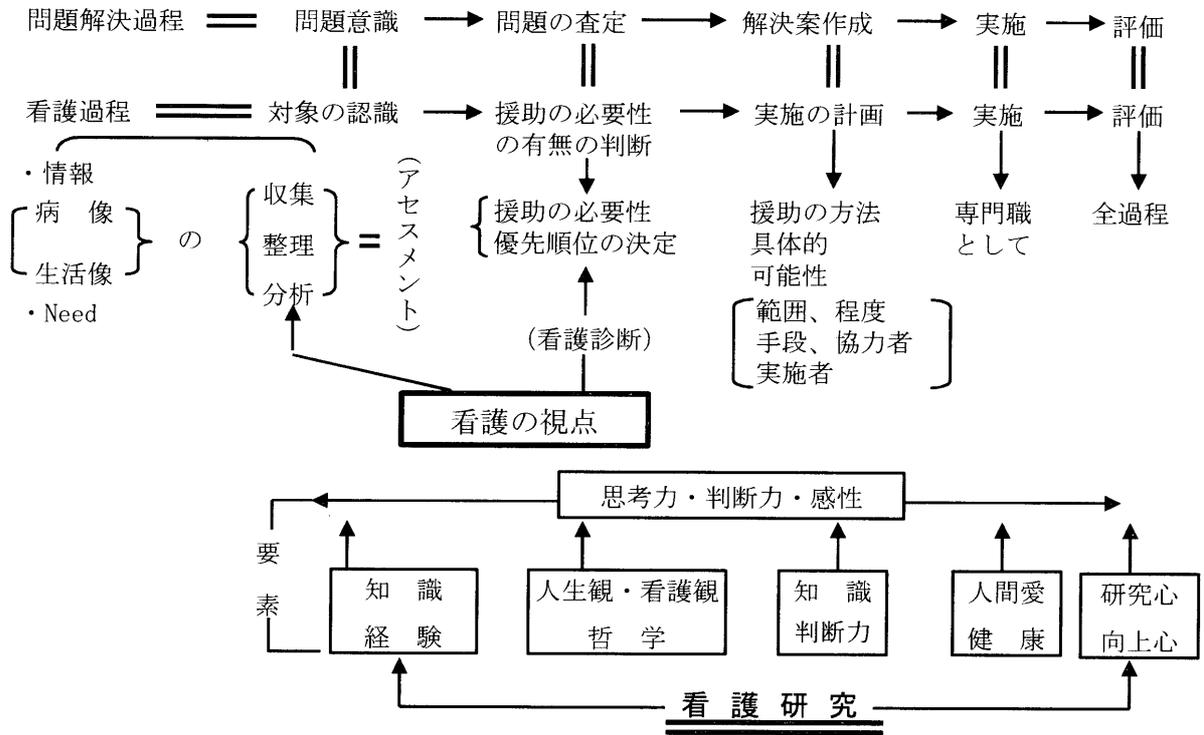


図2. 看護における技術の構造

① 対象者の認識

人間を総合的・全人間的に把握する。情報として病像（あるいは健康像），生活像を，そしてその人，あるいは家族の欲求・希望を収集・整理・分析する。この場合大事なことは看護の視点で必要なものを判断することである。そこで目標が見えてくる。時としてこの段階をふまえる余裕はなく，直接対象者と接することもある。このような場合には特に実施者の要素として高い知識と経験が必要となる。

② 援助の必要性の有無の判断

看護の目標は自立と安寧を目指して健康のより上位の段階をめざすことであり，自立を阻害するような事態はあってはならない。援助とは長い目でみての自立への助けでなければならない。従って実施者は確固たる人生観，看護観が必要となる。

③ 実施の計画

これは援助方法の具体的かつ実施可能な方法を考える。すなわちどの範囲に，どの程度の，どんな手段で，誰が，協力者は必要か，他者に依頼す

べきかなどを考える。この段階では特に知識と判断力が必要である。

④ 実施

これは当然専門職業人としてであり，その要素も前述した通りである。根本的には人間愛，慈悲の心をもって実施する，温かい心と手である。又自己の健康管理につとめ，良好な健康状態であれば心に思っていることも実施できないし，注意力も散漫となり，事故に連なる結果となるおそれが生じる。

⑤ 評価

結果だけの評価でなく，一連の過程の評価でなければならない。これには看護実践そのものと，自己の心の反省・評価も加え；研究心，向上心を高めることにもなる。

これら一連の過程を通して必要な要素には，学問，経験に支えられた，思考力，判断力それに人間としての豊かな感性が必要であると考えられる。

III. 専門職看護師としての看護活動

教育機関で基礎的学問を習得し、ライセンスを取得した後は、人間形成を基盤として、実践活動は常に理論に基いたものであり、研究的思考をもち、理論の開発につとめることが必要である(図3)。

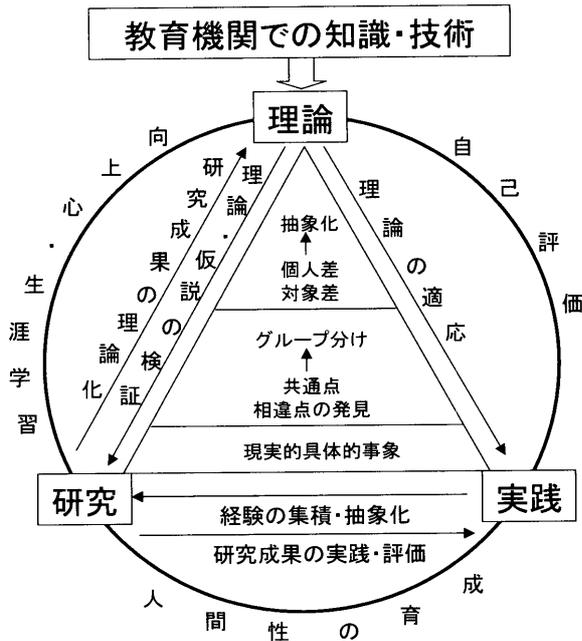


図3. 専門職看護師としての看護活動

IV. ナイチンゲールを通してみる看護婦(師)像

—ナイチンゲール著の訳本から抜粋—

○ 看護の仕事は快活な、幸福な、希望にみちた精神の仕事です。犠牲を払っているなどとは、決して考えない、熱心な、明るい活発な女性こそ、本当の看護婦といえるのです。

○ 看護婦は、自分の仕事に三重の関心を持たなければならない。そのひとつは、その症例に対する理性的な関心、そして病人に対する(もっと強い)心のこもった関心、もうひとつは病人の世話と治療についての技術的(実践的)な関心である。

○ 看護婦は病人を看護婦のために存在するとみなしてはならない。看護婦が病人のために存在す

ると考えなければならない。

○ 病人は見習生に教育の機会を与えるために存在しているのではない。むしろ見習生は、自分自身のためではなく、病人のために病院に来ているのだと自覚しない限り、全然いないほうがましなのである。

○ 教育の仕事は別として、世の中で看護ほどに、その仕事において「自分が何を為しうるか」が、「自分がどのような人間であるか」にかかっている職は、ほかにはないのです。

○ 無私ということなくしては、本当の看護はありえないのです。

看護婦のなしうる最上の働き、それは、まさに患者に看護の働きを殆ど気づかせないことであり—ただ患者が要求するものが何もないと気づくに至った時だけ患者に看護婦の存在に気づかせること—なのである。

○ 私は、患者を自分の身体について思い煩うことから開放するために看護婦が存在すべきだと言いたい。

○ 看護婦は、患者の顔に現れるあらゆる変化、態度のあらゆる変化、声の変化のすべてについて、その意味を理解すべきなのである。また看護婦は、これらのことについて、自分ほどよく理解している者は他にはないと確信がもてるようになるまで、これらについて研究すべきなのである。

○ 看護婦が学ぶべきAは、病気の間とはどういう存在であるかを知ることである。Bは病気の間に対してどのように行動すべきかを知ることである。Cは、自分の患者は病気の間であって動物ではないとわきまえることである。

○ 自分自身は決して感じたことのない、他人の感情のただ中に自己を投入する力を、これほど必要とする仕事は、ほかには存在しない。

参考文献

- 1) F. ナイチンゲール著，薄井坦子・小玉香津子
他訳：看護覚え書．現代社，東京，1988
- 2) F. ナイチンゲール著，湯楨ます監修 薄井
坦子他訳：ナイチンゲール著作集（第二巻）．
現代社，東京，1974
- 3) F. ナイチンゲール著，金井一薫，小南吉彦
共訳：看護婦登録制度についての意見書．
総合看護 1，1987
- 4) 金井一薫：看護のなかで語りつがれるもの．
現代社，東京，1985